





巻頭言

総合科学部の「歴史力」



僕が広島大学文学部に入学したのは、一九七八年。専門はアジアを対象とする歴史学研究で、広島文理科大の設立から数えれば、五〇期生となる。入学早々、運動音痴であるにもかかわらず、僕は体育会硬式庭球部に入ってしまったのだが、そこで出会った教育学部の友人は、総合科

学部にも猛烈な対抗心を持っており、「総科生は英語ができ、就職率も高いが、学問的には深みに欠けるよね」と揶揄していた。とはいえ、世事に疎い僕は、その総科評が当たっているのか、理解できなかった。

テニス部を途中で辞め、大学院進学を考え始めるきっかけとなったのが、一九八〇年三月に総合科学部の小林文夫先生が組織した広島大学学生訪中団への参加だった。この旅行団は北京・上海・南京・西安を訪れ、得難い経験をさせてもらったが、その運営は、小林門下の大学院生たちが担っていた。その後、彼らに誘われるままに、総科の院生・学部生たちを中心とする英書の輪読会に、文学部の友人とともに参加することになった。

読「賢」従き雷したの

の大学院と文学研究科、どちらを選ぶべきなのか、悩むことになった。一度は総科の魅力の虜になったのだ。だが最終的には「古い歴史学」を選んだ僕は、総科との関わりも薄くなった。今その理由を詳述する余裕はないが、偶然の産物というべき面もあったように記憶している。

そんな僕が縁あって総科に赴任したのは、一九九六年の一〇月だった。そのとき総科の先輩教員からいただいたアドバイスは、「文学部から総科に異動するということは、寿司職人を目指し、伝統的な技を精一杯磨いて店を開いたら、お客さんから蜂蜜をかけた握り寿司が欲しい、と言われるような経験をするんだよ」というものだった。自分が身につけた学問を、総科生が求めているわけではない、ということだった。そのアドバイスのおかげで、二〇年近い総科生活のなかで、教員として嫌な思いをしたことはない。僕の

研究が総合科学の名に相応しいものかどうかは忸怩たるものがあるが、それでも歴史学を基礎に、政治哲学や文学などを組み込んだ学際的な地域研究を目指してきた。なによりも地域研究とは問題解決型の研究方法であり、今日的な課題を常に意識して研究に取り組むようにしてきた。

今、総科と僕の関わりを思い返したとき、最近の学生のなかには、大卒でやるべきことが決まらないから、「とりあえず」総合科学部という人も増えてきたように感じる。総科というユニークな場所を、積極的に活用するというよりも、まずは決めないで済む場「責任をとらずにすむ場として、総科を消極的に選択するケースといえようか。

とはいえ、こうした消極的な印象を述べるのは、僕が年を取ってみなさんとの距離が広がってきたからかも知れない。自信をもって「蜂蜜かけ寿司」を注文する学生を含め、今

でも熱心で優秀な学生と出会い、総科生のすごさを感じ、教えられることも少くないからである。我々の側が精神的な若さを保つことこそ、重要なのかも知れない。

いずれにしても、みなさんにはぜひとも総合科学部の歴史を、自らひもといて欲しい。さしあたり総科創立三〇周年を記念して出版された叢書「インテグラレ」の最初の一冊、『シンポジウム・ライヴ 総合科学!』丸善出版、二〇〇五年などが参考になるだろう。因みにこの叢書は、今まで一〇冊刊行されている。

私たちの学部には、日本の学問をかえるのだという先輩たちの理想と失敗、そして、それでも夢を追うアグレッシブな歴史が刻まれている。僕たちはそれ追体験することで、自分たちの持っている可能性の大きさに、確信が持てるのではなからうか。